

外部有識者ヒアリング結果

■ ヒアリング実施概要

日時	2020 年 2 月 20 日(木) 14:00-15:30
訪問場所	東京大学 伊藤国際学術研究センター 会議室
出席者	東京大学 未来ビジョン研究センター 江間特任講師 東京海上日動リスクコンサルティング株式会社 関本、加藤（記）

■ 外部有識者プロフィール

江間 有沙（えま ありさ）

東京大学未来ビジョンセンター 特任講師／国立研究開発法人理化学研究所革新知能統合研究センター 客員研究員／（一社）日本ディープラーニング協会 理事
専門は科学技術社会論。人工知能やロボットを含む情報技術と社会の関係について研究。

【委員会】

- ・ ICT インテリジェント化影響評価検討会議（AI ネットワーク化検討会議） 社会・人間分科会 構成員
- ・ 人間中心の AI 社会原則会議 構成員

【主な著作物】

- ・ 『AI 社会の歩き方—人工知能とどう付き合うか』（化学同人,2019 年）
- ・ 『人工知能と人間・社会』『AI のガバナンス』（勁草書房,2020 年,297-344）
- ・ 『リスク学辞典』『人工知能の普及に伴うリスクのガバナンス』（丸善出版,2019 年,676-679）
- ・ 『この 1 冊でまるごとわかる 人工知能&IoT ビジネス 2018-19』『AI と倫理』（日経 BP 社,2018 年,50-51）
- ・ 人工知能社会のあるべき姿を求めて—人工知能・ロボットについて語る参加型対話イベント実施報告概要、『科学技術社会論研究』 vol. 16, pp. 142-146.

■ 江間特任講師の主なご発言

AI に関するリテラシー教育（研究・議論）について

- ・ AI 技術（深層学習など狭い意味でも AI 技術）を利用した製品・サービスが、未だ消費者にあまり普及していないため、医療、生活、嗜好といったセンシティブな情報が吸い上げられることによるリスクに対するリテラシー教育の研究・議論は、日本ではほとんど進んでいないと考えている。
- ・ 製品・サービスの利用実態調査（例：利用規約を読んでいるか？）に基づく、議論は行われているかもしれない。

- ・ 以前（10 年ほど前）、IT リテラシーに関する教育がどの程度進められているのか調査したことがある。例えば、カナダの教科書では、「自分の情報を守るために匿名で利用したり、ある程度嘘（ダミー）の情報を提供しても良い」として自分の情報を守る方法が書かれていた。一方で、日本の教科書の場合は、「情報は出さない」や「気を付けて使いましょう」といった、どちらか一方に寄った内容が書かれていた。教科書に「嘘を入力してもよい」とは書けなかったためではないかと思う。
- ・ （過度にリスクを伝える事も問題ではあるが、）「教えてくれなかった（のでリスクがあることを知らなかった）」ことによるトラブルの発生は避けなければならないと思う。
- ・ 日本国内においては、ディープフェイク¹のような「悪用されるリスク」に関する議論が進んでいない。

AI（技術・サービス）の問題について

- ・ 中国の「セサミクレジット²」のような信用スコアサービスは、今後日本においても問題となる可能性が考えられる。例えば、「（スコアの上昇が）面白いから」や「より便利になるから」や「お金になるから」といった感じで、利用者がどんどん情報を提供してしまうかもしれない。但し、これらの問題は、「AI リテラシー」というよりも、「金融リテラシー」の側面もあるかもしれない。
- ・ 現在、AI 技術を利用した製品・サービスはインフラの一部（社会になくてはならない存在）になっているので、「AI を利用しない」という選択肢を選ぶことは難しくなっている場合がある。
- ・ 近年では、様々なサービスを 1 つのアカウントで管理しているので、「ニックネームを使う」、「捨てアドレスを使う」、「嘘（ダミー）情報がある程度入れる」等の利用者側の対応はより難しくなっている。
- ・ データが蓄積されていれば、（仮に）亡くなってしまった本人の同意が無かったとしても、『AI 美空ひばり』のように声を復元することができてしまう可能性がある。
- ・ AI 技術は、物理的な（身体への影響等の）リスクだけではなく、意思決定、人の行動、感情に作用する可能性がある。
- ・ AI 技術による問題とは直接関係ないが AI に関する問題としては以下のようなものもある
 - Addiction(依存)問題（例：chatbot との会話(感情移入)、サービスへの過剰課金）

¹ 人工知能にもとづく人物画像合成の技術のこと。画像（写真）だけでなく動画でも作成されている。

² 芝麻信用（セサミクレジット）とはアリペイが提供する信用スコアのこと。アリペイの返済遅滞などの支払い履歴やマイカーや住宅など資産の保有状況はもちろんのこと個人の学歴や職歴、交遊関係、交通違反やルール・マナー違反などの行動歴も評価されていると言われている。

- スマートスピーカーへの命令口調が子どもに影響してしまう（例：子どもの話し方が命令口調になる）

消費者が AI を利活用するにあたって

- ・ 「危険だから使わない」ではなく、「理解したうえで使う」「正しくおそれる」ことが重要であると思う。
- ・ 一度収集・学習した AI データを消す（無くす）ことは難しい（個人への誹謗中傷などを検索結果に表示させないようにするという対応は、表示順位を下げたり、不可視にしているだけで、なくなっているというわけではない）。また、AI のロジックを事業者が利用者に対して完全に説明することは難しい。詳しい説明はせずとも、世界観や仕組みを説明する必要があると思われる。なお、説明が難しい点について、あえて細かく説明する必要はないかもしれない（上記の検索結果に表示させないということについて、詳細に説明した場合には、そのために利用が進まなくなるおそれがある）。
- ・ ただし、知らないことによるリスクがあるため、一義的には説明をし、詳細を知りたい人は、さらに知ることができるなどアクセスの方法を示すのが良いと考える。
- ・ 移行期においては、情報の提供と利便性や安全性などがトレードオフの関係になっていることは理解する必要がある。それを理解したうえで、どちらの価値を重視するのかを判断できるための材料や事例を示す必要がある。また、トレードオフにおいて A か B か、ではなく A も B も両方とも守るというための技術や制度の検討が進んでいることについても示す必要がある。
- ・ 利用停止後（例：死後）もデータは存在している可能性があるため、データがどのように扱われるかを利用者は理解しておく必要があると思う。
- ・ AI の開発者、AI を利用した製品・サービスの開発者、製品・サービス提供者と様々な関係者（ステークホルダー）がいるため、何かあった場合に誰に何を伝えればよいか分からない現状があるが、（利用者が）嫌だと思った場合、声をあげられる環境を用意する必要がある。
- ・ 利用規約を確認することが重要である。しかしながら、スマホアプリの場合、ソフトウェア更新（アップデート）の際には、利用規約等を確認させないケース（勝手にアップデートされる）も多いと思われる。

ハンドブック作成にあたって

- ・ 消費者庁より提供する情報として、消費者がどのレベルの内容であれば安心できるかを把握しておくことが重要だと思う。
- ・ 「AI が得意なこと、苦手なこと」という観点からのガイドライン作成は、技術の観点からの見方だと思う。説明の仕方としてはシンプルでわかりやすいが、説明できる

内容が限られてしまうかもしれない。

- 個別のシナリオ（ケース）を作る場合は、作成者の世界観が表れてしまうので、様々な視点で出していくことが重要である。特に、若者、女性、外国人の視点が入っていないケースが多く見られる。
- スマホ等に入力する情報は、家の中だけ、友達同士だけに情報が共有されているわけではない事（背後にデータセンター、企業が情報を収集・分析をしている事）を知ってもらうことが重要だと思う。

以上